特別展「天之美禄 酒の美術」展によせて

光明真言功徳絵詞
―仏教における飲酒―

御神酒にみるように、米から作る酒は神に捧げる供物として欠かせない神聖なものであり、神事や直会などの場では、酒は神と人、また人と人をつなぐ役割を果たしています。これに対して、仏教では飲酒による弊害から、酒を売ること、飲むこと、または人に飲酒を勧めることが厳しく戒められています。

しかし一方で、寺院で僧侶が醸造する「僧坊酒」の酒造技術は高く、酒造の技術と産業化の歴史においても重要な意味を持ちます。本稿では、仏教の中で飲酒がどのように捉えられていたのか、絵巻に描かれた飲酒の場面から考えていきます。

重要文化財「光明真言功徳絵詞」（紙本著色　室町時代・応永五年（1398）滋賀・葛川明王院）は、密教の真言である光明真言を唱えることの功徳が詞と絵であらわされています。下巻の奥書より、応永五年（1398）に京都の東山八坂吉祥園院に常住の絵とされたことが知られ、高山寺、および天明七年（1787）には鳳閣寺に蔵され、慶応元年（1865）に葛川阿都山寺明王院に奉納されています。

光明真言は大日如来の真言であり、この真言を唱える功徳として、一切の罪業が除かれ、福楽が得られるといい、この真言をもって加持した土砂を死者にかけると、生前の罪障が滅するとされ（加持土砂）、平安時代より行われていることが知られます。

本絵巻は上中下の三巻から成り、上巻には光明真言の現世利益における功徳、中巻には四悪趣（地獄・餓鬼・畜生・修羅の四悪道）から救われる功徳と加持土砂の功徳、下巻には高山寺明恵上人の弟子定円の蘇生譚と浄土への往生が述べられています。各巻には白い月輪が描かれた掛け軸を前に観想を行う人物が描かれ、功徳を受けるために行うべき姿が示されています。

上巻の第三段では、詞書には北方に向かって光明真言を二十万遍誦せば、貧しく困窮した暮らしから大富貴の身となると述べられます。絵画では、竈に炊く米も無く、鼠が遊ぶほどで、壁が崩れかけ傾いた屋敷に住む人々の貧窮した様子が描かれますが（図1）、一人の男性が月輪を前に光明真言を唱えており、次の場面では一転して大富貴となります。雉や兎などの食材とともに次々と酒壺が運び込まれ、広々とした屋敷内では折敷（おしき）と両口銚子、青磁の壺が並び、酒宴が行われ、男性が手に盃を持ってまさに酒を飲もうとしています（図2）。奥の部屋では、女性と子どもが食事をのせた漆塗りの円形盆を前に顔を綻ばせています。

また、第四段では東方に向かって光明真言を三十万遍誦せば、上下諸人の愛敬（あいきょう）（愛情と尊敬）を得て、富貴自在（思うさまに富み栄えること）となると述べられます。男性が光明真言を誦し、手紙を読んだ後に出かけ、紅葉が色づく季節に女性たちから饗応を受けています。折敷が男性の前に並べられ、女性の一人は両口銚子を持ち、酒を注ごうとするしぐさが見られます。

続く中巻では、地獄・餓鬼・畜生・修羅から救済される場面に続き、第五段では極悪の罪業により死後地獄に送られた人々を、僧侶が光明真言を一百八遍誦し、加持土砂によって救済する様子があらわされます。狩猟による殺生、強盗、殺人、卒塔婆を壊すといった悪行とともに男女が飲酒逸楽にふける様子（図3）が描かれています。さらに、地獄の火車が迎えに来る先には、両手を挙げて恐怖におののいたまま亡くなったと見られる人物が屋敷の中に横たわっています（図4）。僧侶が加持土砂を墓所に撒くと、立ち上る雲に畜生・修羅・地獄道が見られることから、これらからの救済を意味していると考えられます。

上巻第三・四段と中巻第五段では、ともに酒宴や饗宴での飲酒の場面が見られました。しかし、これらの飲酒の場面が意味するものは大きく異なることがその内容から見えてきます。中巻第五段では、男女が同席して飲食し、乱れる逸楽を罪悪の一つとするのに対し、上巻第三・四段では、光明真言を唱えることの功徳として得られる福楽を象徴して、飲酒を伴う豊かな食事の情景が描かれているからです。仏教では在家信者が守るべき五戒や沙弥・沙弥尼の守るべき十戒において不飲酒戒が定められているものの、福楽の描写には、豊かな食事と飲酒といった人々が求める直接的な幸福が反映されていると考えることができるのではないでしょうか。

各々の場面で人物の表情や動きが丁寧にあらわされ、器物も細部まで描き込まれることにより、善行の前後の場面は対照的に描き分けられています。さらに、中巻第五段では地獄からの迎えに恐れおののく人物と、すぐそばの縁側に坐り、他の人には見えていない火車を見るあどけない表情の童子が効果的に対比されて示されているなど、随所に見ごたえのある作品です。（瀧朝子）

※上巻および下巻（奥書）は前期、中巻は後期に展示いたします。

図1

図2

図3

図4

季刊 美のたより No.216
令和3年10月1日
発行　大和文華館

Copyright © The Museum Yamato Bunkakan. All RightsReserved.